主日礼拝　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2014年1月２６日

**説教題「神の国は近づいている」**

新約聖書　ルカによる福音書第２１章２９－３６節

それから、イエスはたとえを話された。「いちじくの木や、ほかのすべての木を見なさい。葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずと分かる。それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。

はっきり言っておく。すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。

天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。さもないと、その日が不意に罠のようにあなたがたを襲うことになる。

その日は、地の表のあらゆる所に住む人々すべてに襲いかかるからである。

しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」

ディボーションノート　４　　2014年1月２７日―2月１日

|  |
| --- |
| 1月２７日(月)　詩篇９９篇  「主なる神は聖なる方」と3回繰り返されています。「カドーシュ」「聖」という語源は「明るく輝く」「分離する」と言う意味があります。明るく燃える火や輝く栄光に表わされる聖と、汚れたものから完全に分離する聖とがあります。神は大いなる畏るべきお方で、わたしたち人間は礼拝することで、神の足もとに近づくことが許されています。神はエジプトの奴隷であった民を導き出され、昼は雲の柱、夜は火の柱で導かれました。これらは神が共におられる臨在のしるしでした。神が聖であられるゆえに、神はわたしたちを赦して聖なるものとしてくださることも、また聖なる裁きによって悪に報復することもできるお方です。この神を心から礼拝できた恵みを感謝します。 |
| 1月２８日(火)　詩篇１００篇  　歓声をあげよ、仕えよ、来たれ、知れ。つぎつぎに招く言葉が続きます。冒頭から「喜び」が繰り返されます。信仰は喜びです。主イエス・キリストの愛を知った喜び、十字架によって罪から解放された喜び、毎朝新しい命が与えられている喜び、新鮮な恵みの中を生きられる喜び。信仰は喜びです。まことの神を知り得た喜び、わたしたちを創造された方と出会い、羊のように導かれる喜び。信仰は喜びです。静かな喜び、深い喜び、そして共に集う大きな喜び。神の恵みと真実は変わることなく、子々孫々に及びます。だから神を喜んで神を賛美し礼拝し、喜んで神と人とにお仕えしましょう。わたしたちの愛の行いが、神への賛美となりますように。 |
| 1月２９日(水)　詩篇１０１篇  　主イエス・キリストはエルサレムの神殿にお入りになり、最初にされたことは宮きよめでした。神殿が商売の場所となり強盗の巣のようになっていたからです。祭司たちの欺きと、パリサイ人たちの高慢。両替人たちの欺瞞と商人たちの搾取。主イエス・キリストは祈りの家、礼拝の場所を、本来の姿にきよめられたのです。ところが、それが人々の憎しみを買い、十字架に殺す動機のひとつになりました。悪に敵対して歩むことは、勇気と犠牲とが伴います。神に助けと守りの中で、神の道に歩ませて下さいと願い祈ります。 |
| 1月３０日(木)　詩篇１０２篇  　苦しむ者が思いくずおれて嘆きを主の前に注ぎ出すときの祈り、と見出しにあります。７つある悔い改めの詩篇の５番目のものです（6・32・38・51・102・130・143）。1－11節は詩人の悩みが歌われます。心が完全に打ちしおれ、孤独と後悔とが襲ってきます。敵にあざけられ苦しんでいるが、根本原因は神がお怒りになっていることです。12節の「しかし」で一変します。神は永遠なる方で、恵みとあわれみに豊かなお方です。乏しい者の祈りをかえりみ、その願いを軽視されない方です。23節からは再び11節の悩みにもどり、迫り来る死の恐れの中で神に嘆願します。人生の半ばで、神よ私を取り去らないでください、との祈りはみんなの祈りです。先週の午前の祈り会で、韓国サラン教会の金京姫姉妹が救いの証をしてくださいました。「両親の不和の中、自分の弱さを絶対に見せまいと頑張ってきました。笑顔をふりまく普通の中学生でしたが、心の中は寂しさで一杯でした。クリスマスの夜に主イエスを信じて、自分がすっかり変わりました。家庭の家内にいろいろな事が続き、母親から教会に行くのを反対されました。でもその母も主イエスを信じるようになりました。」神は生きて働かれ、万事を益としてくださる。一同が深く感謝しました。 |
| 1月３１日(金)　詩篇１０３篇  　わがたましいよ、主をほめよ。詩人は自分のたましいに、こう呼びかけるのです。内なるすべてで、すべての恵みをほめる。すべての不義をゆるし、すべての病を癒やしてくださる神をほめる。神のゆるしの徹底さを賛美する言葉は、わたしたちの想像を越えています。10－13節に、天が地よりも高いように、東が西から遠いように、神はわれらの咎を遠ざけられる、と歌います。こういう表現が今から3000年前に生まれていることに驚きます。自分たちの罪を神がどんなに深く憐れみ、赦そうとしてくださっているのか。人の存在のはかなさとを草花にたとえ、神の永遠の慈しみに対比して歌う。このような歌は、神から与えられなくては、生まれてこない歌ではないでしょうか。朝日夕日、自然の万物を見渡すときに、賛美の霊をわたしたちに注ぎ、新しい言葉で賛美させてください、神よ。 |
| ２月１日(土)　詩篇１０４篇  天地万物を見て、ああここにも創造主なる神の手の業があると、見出した詩人は、その一つひとつを賛美します。天地は神の知恵による最高の創造物でみちている。すべてのものが最高傑作です。すべては神の御心のままに支えられ、滅ぼされてもまた生まれます。目にする一切の中に神の働かれる現実を見出した詩人は、神に生かされている自分がすべきことは、神を賛美することであると分かるのです。賛美は、神の業であるこの世に生きる全てのものに、無くてならないものです。主によって喜ぶ。何かが良くなったから賛美するのを越えて、神がわたしの神であられるゆえに喜び賛美するです。わがたましいよ、主をほめよ。主をほめたたえよ。 |